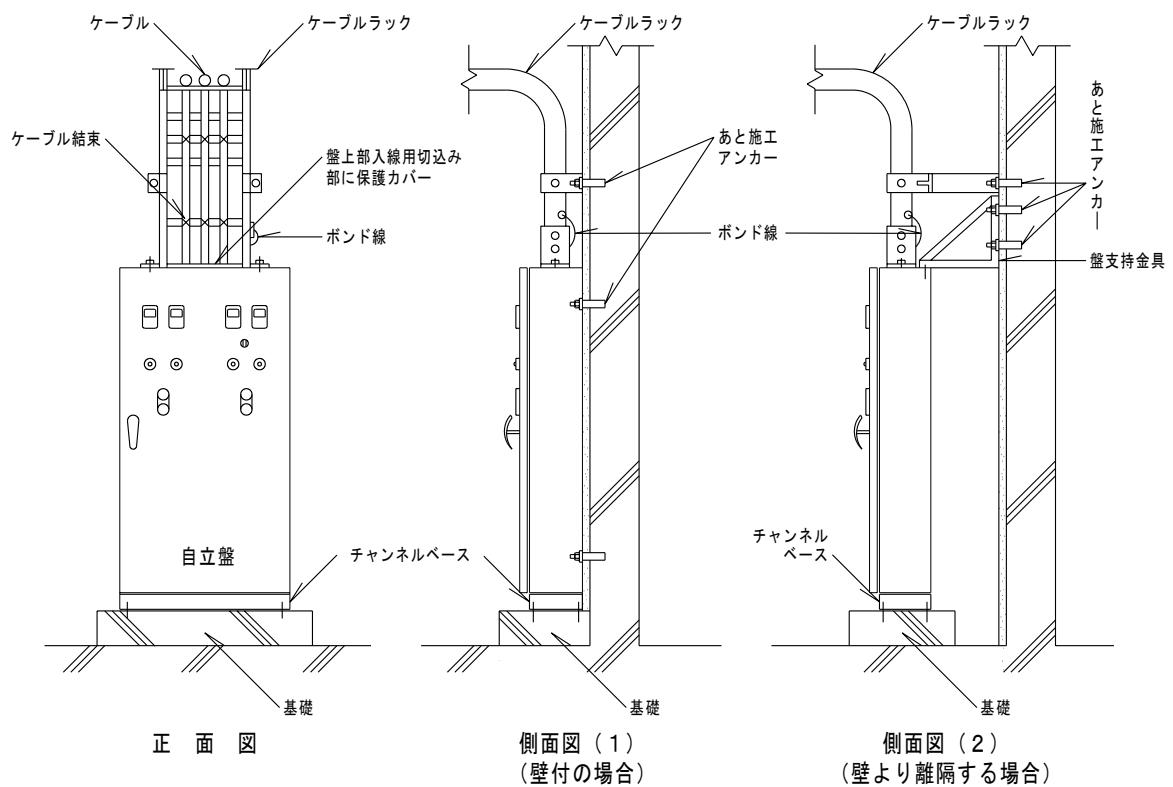


盤

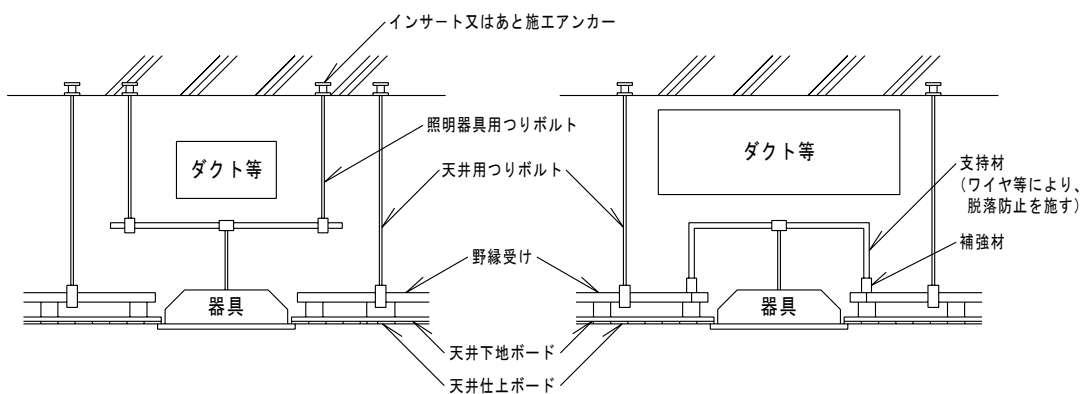
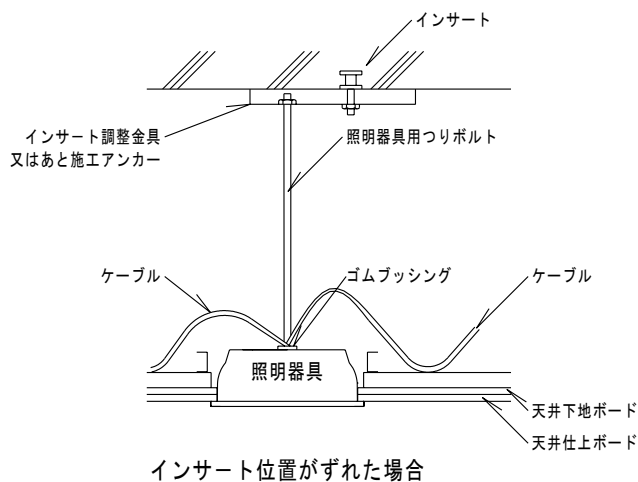
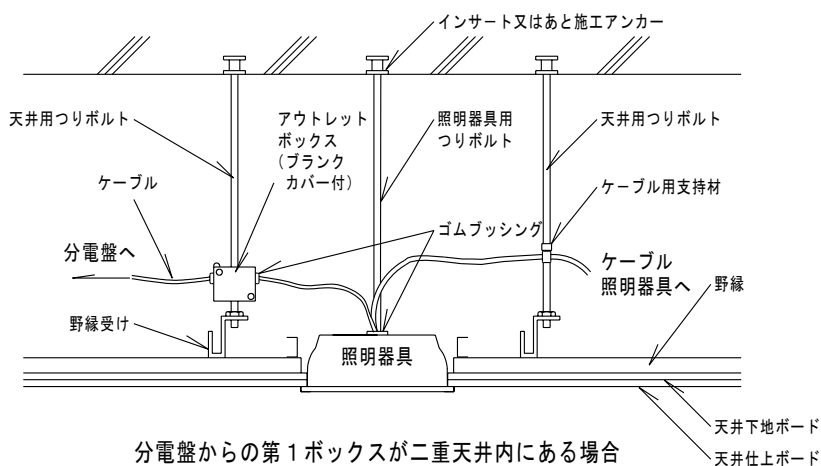
類

403

自立盤への配線の敷設 - (3)
(ケーブルラックの場合)

注意事項

1. 自立盤の取付けは、一般的に上部はケーブルラック又は電線管、下部はピット又はプルボックスを設けて施工する。
2. 自立盤の場合は、あと施工アンカーにより床、壁とも堅固に取付ける。
3. コンクリート埋設配管を行う場合は、401図による。



注意事項

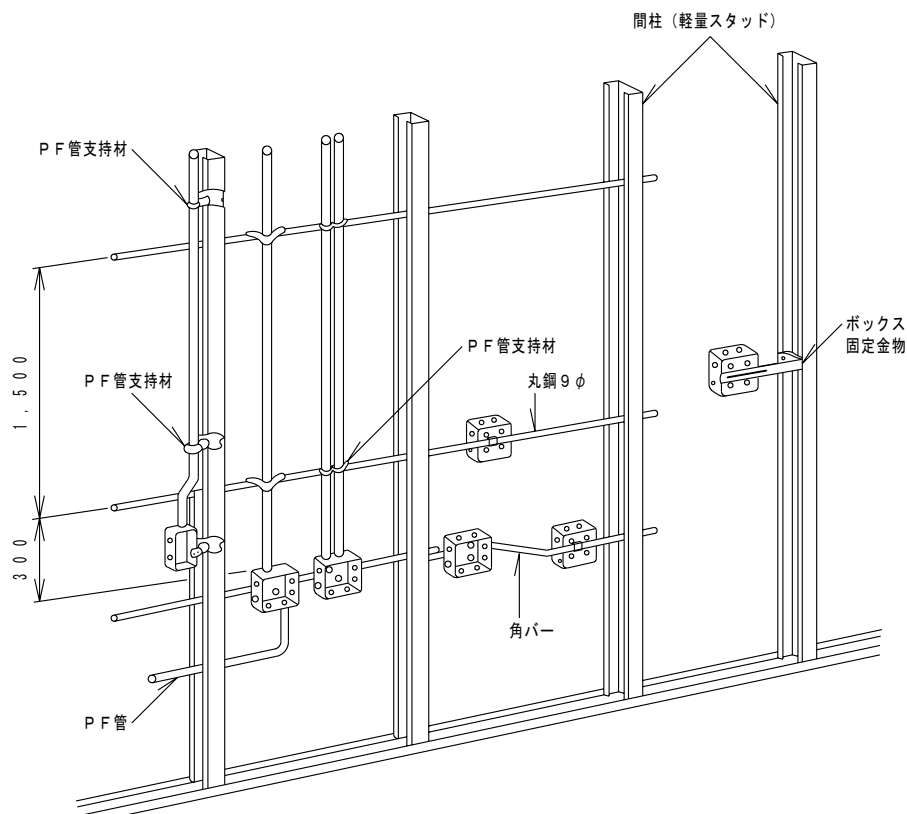
1. 器具の配置は、他設備との取合いを十分行って決定する。

屋内配線

905

PF管の軽量間仕切内配管及び ボックスの取付け

(単位 mm)



注意事項

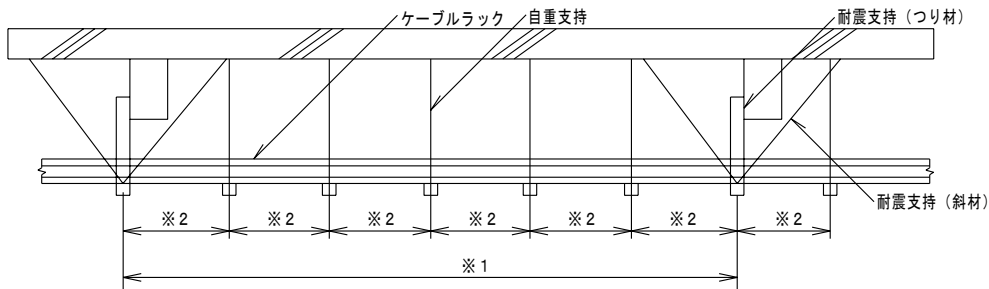
1. 管の支持間隔は、原則としてボックス周り0.3m以下、その他は、1.5mとする。
2. 管の支持材は、バインド線、合成樹脂製バンド、専用支持金具等とする。

屋内配線

913

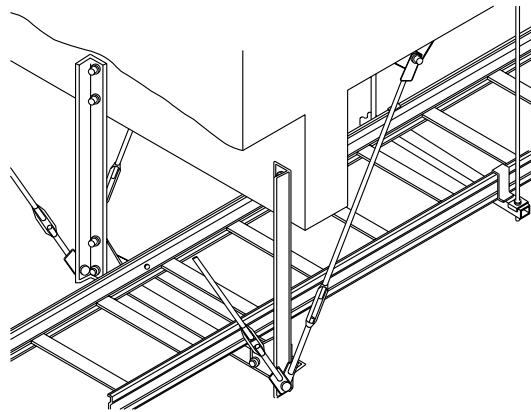
ケーブルラックの 水平支持方法 - (2)

(単位 mm)

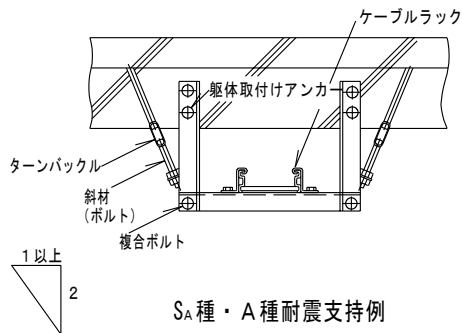


※1 耐震支持材の間隔は表を参照する。

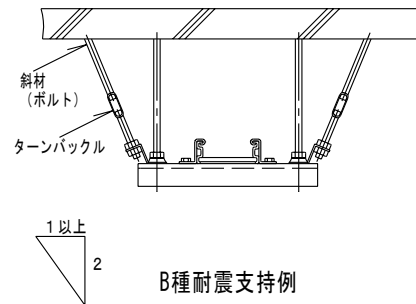
※2 ケーブルラックの自重支持間隔は、鋼製で2 m以下、その他は1.5 m以下とする。



耐震支持施工例



S_A種・A種耐震支持例



B種耐震支持例

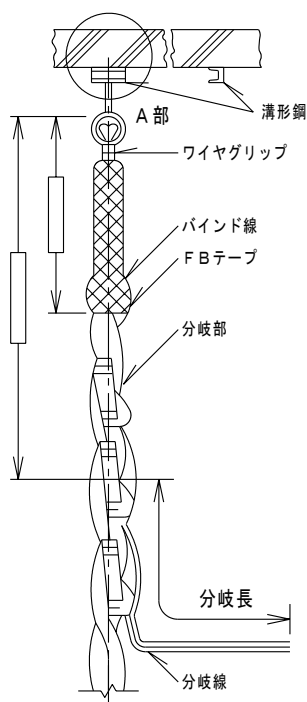
横引き配管等の耐震支持

設置場所	特定の施設		一般の施設	
	電気配線 (金属管・金属ダクト・ バスダクト等)	ケーブルラック	電気配線 (金属管・金属ダクト・ バスダクト等)	ケーブルラック
上層階 屋上及び塔屋	1.2 m以内ごとにS _A 種耐震支持	6 m以内ごとにS _A 種耐震支持	1.2 m以内ごとにA種耐震支持	8 m以内ごとにA種 又はB種耐震支持
中間階 1階及び地下階	1.2 m以内ごとにA種耐震支持	8 m以内ごとにA種耐震支持	1.2 m以内ごとにA種 又はB種耐震支持	

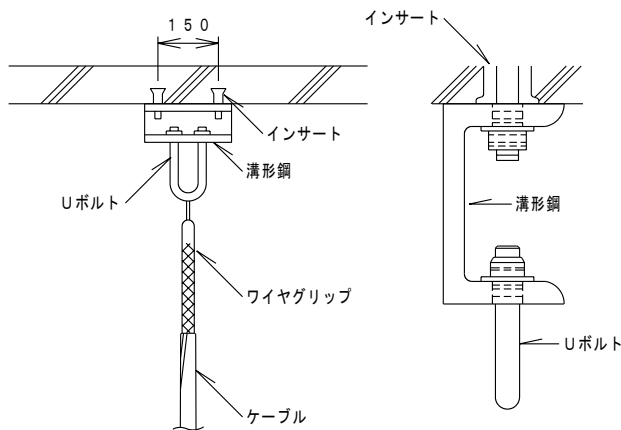
注意事項

1. 耐震クラスに適合した間隔で耐震支持を行う。

(単位 mm)



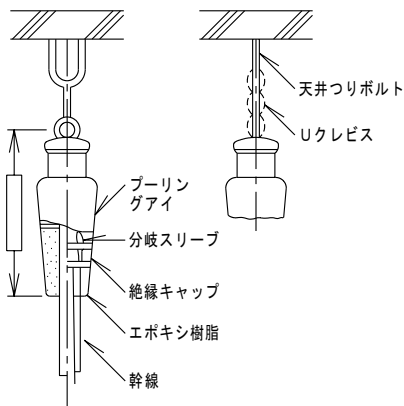
ワイヤグリップ方式



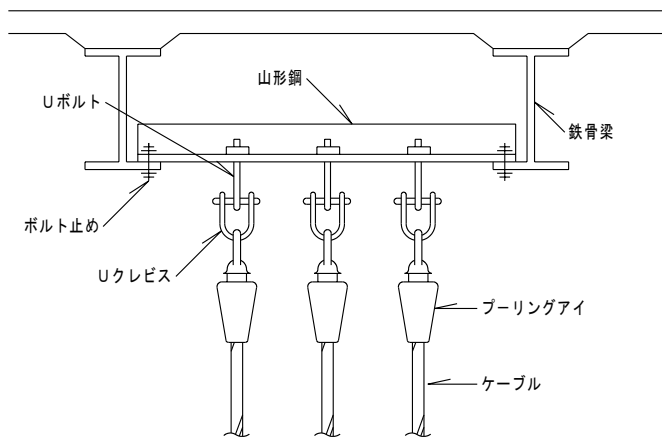
正面図

側面図

A部詳細図



プーリングアイ方式

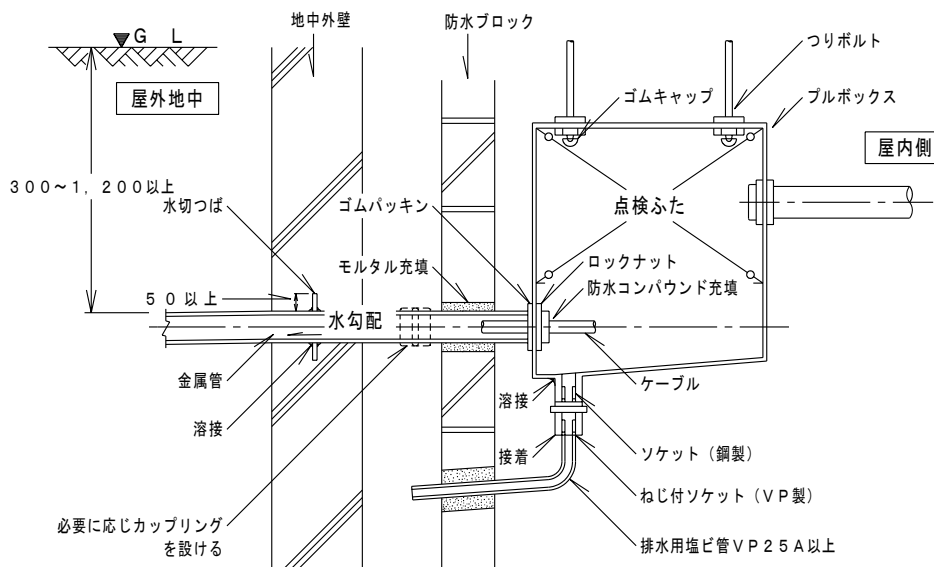


ケーブル本数が多い場合

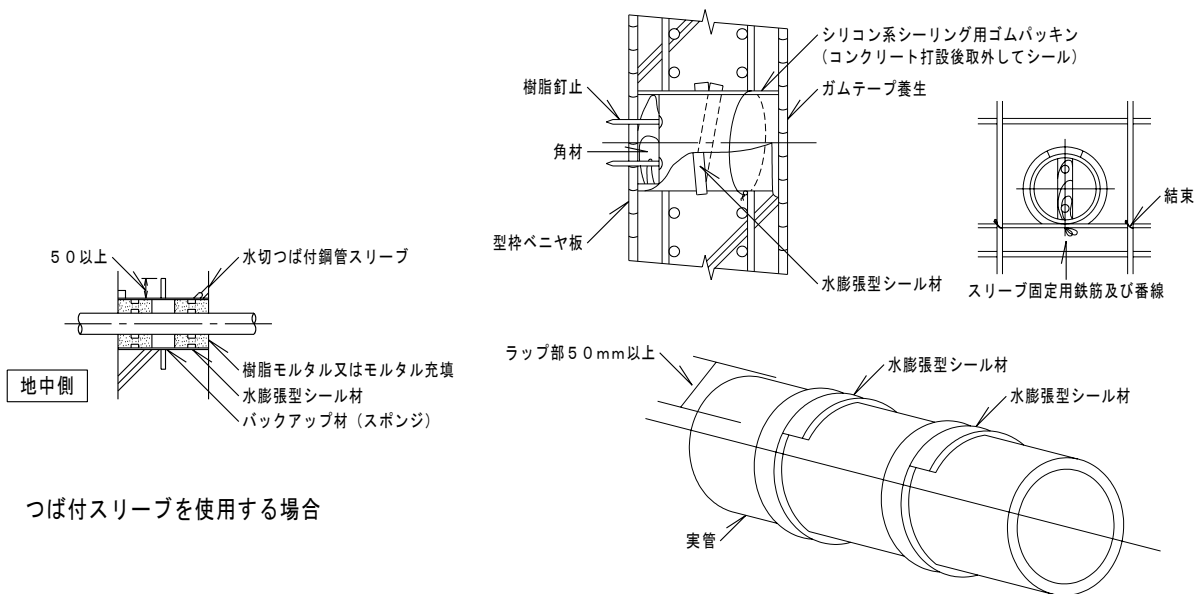
注意事項

1. ワイヤグリップ方式は、低中層ビルで小型サイズのケーブルに用いる。
ワイヤグリップの適合ケーブルサイズは、製造者の技術資料による。
2. プーリングアイ方式は、高・超高層ビルの幹線用ケーブルに用いる。各線心をそれぞれ単独で懸垂碍子によりつる。
つり部の線心相互の間隔は200mm以上必要である。
3. 引張強さは、ケーブルの自重と布設時張力に十分耐えられるものであること（コンクリート強度に対し建築構造打合せを十分行う）。ケーブルつり部の支持材は、安全率4以上の強度をもつものとする。
4. 各部の寸法は、製造者によって異なる場合がある。
5. 鉄骨に取付ける場合は、建築構造担当者と協議する。

(単位 mm)



直埋込みの場合



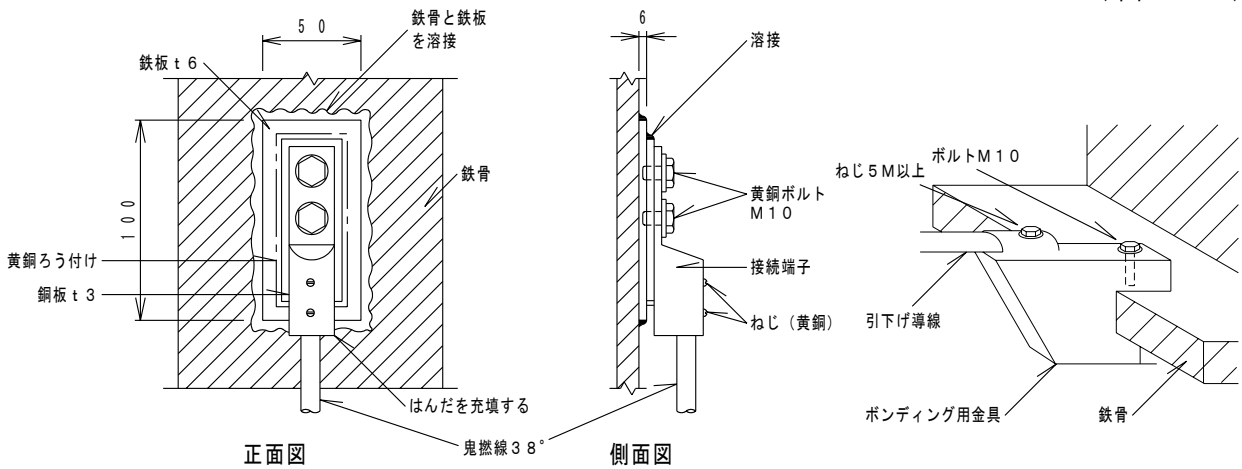
つば付スリーブを使用する場合

水膨張型シール材を取付けたスリーブを使用する場合

注意事項

1. 貫通パイプは、金属管を使用する。
2. ブルボックス以降の配管は、引込管より高い位置に設ける。
3. 点検ふたは、点検しやすい位置に設ける。
4. 記入寸法は、一例を示す。

(単位 mm)



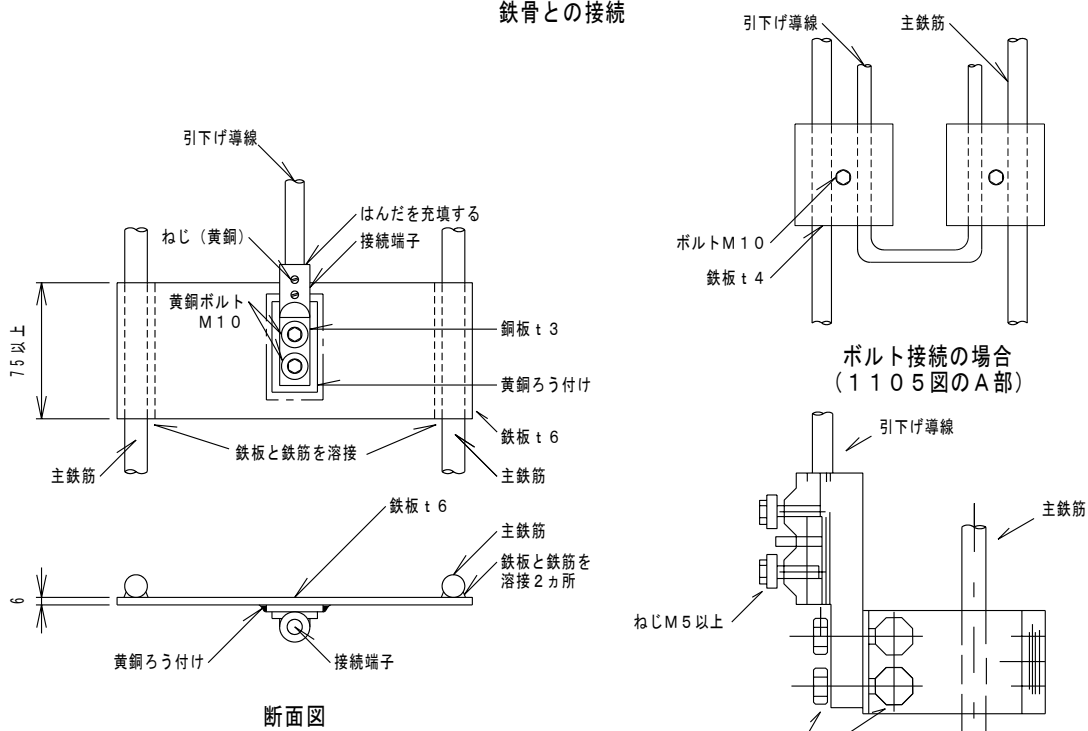
正面図

側面図

溶接の場合

ボルト接続の場合
(1105図のA部)

鉄骨との接続



断面図

ボルト接続の場合
(1105図のA部)

ボルト接続 (クランプ) の場合

鉄筋との接続

注意事項

- 鉄骨との溶接は、鉄骨製作図に記入し、工場にて事前加工することが望ましい。
- 接続端子を付ける銅板と鉄板は、黄銅ろう付けとする。RC造の場合は、鉄板を2本以上の主鉄筋と溶接する。S造の場合は、鉄骨溶接面の錆等を落としてから溶接し防食塗料を塗布する。
- 記入寸法は、一例を示す。
- ボルト接続の場合は、新JIS (JIS A 4201:2003「建築物等の雷保護」) 対応の時のみ使用する。